

## 第12回 豊川流域圏自然再生検討会 議事概要

開催日時：令和元年10月3日（木）14:00～15:40

開催場所：安保ホール7階 701号室

### 1. 開 会

### 2. 挨拶（豊橋河川事務所 所長）

### 3. 議 事

#### （1）第11回 豊川流域圏自然再生検討会 主な意見と対応

事務局より説明した。意見等なし。

#### （2）豊川自然再生事業の概要

事務局より説明した。委員からの主な意見は、次のとおり。

##### <干潟再生>

- ・これまでの干潟再生に用いた砂は、豊川から持って来たものか。また、投入した砂の有機物量は測っているか。  
→基本的には豊川の砂を用いているが、一部は矢作川の砂を用いている。投入した砂の有機物量は、計測していない。（事務局）
- ・底質の粒度組成をみると、施工干潟の中ではTL3-1のみ、数年単位で底質が変動しているようだが、考えられる理由はあるか。  
→TL3-1 でカキ礁が増えたことが、底質の細粒分が増えた要因の一つと考えているが、引き続き分析を行う。（事務局）
- ・各地点とも粒度組成は経年的に大きく変化していないと考察しているが、施工干潟では粒度組成が変動しているようにもみえるため、考察の表現を改めること。
- ・細砂分が多い場所でハマグリ の 個体数が多い傾向がみられる。干潟造成後の粒度組成や強熱減量の変化と、それに伴う有用生物種の個体数の変化について考察すると良い。
- ・アサリ、ハマグリ の 個体数と強熱減量・底質の関係性について、全地点、全年の結果をまとめて散布図に示しているが、アサリ、ハマグリ の 変動要因を細かく検討するには、地点間の環境条件の違いや底質の経年変化を考慮して、丁寧に分析する必要がある。
- ・施工干潟の底質は、施工からの経過年数に伴って有機物が蓄積し、強熱減量が高くなることが想定される。各地点における強熱減量の推移と、ハマグリ、アサリ の 経年変化を分析することで、干潟造成事業における底質と有用生物の関係が把握できる可能性がある。  
→ご意見を参考に分析する。（事務局）
- ・イシガレイ の 個体数は、干潟施工を実施した年に少なくなっているようにみえる。魚類調査については、干潟造成等による生息場の変化を比較できる調査手法となっている

か検討し、造成等のインパクトを考察すること。

→調査手法を確認し、変化要因について考察する。(事務局)

- ・魚類の出現傾向の分析結果は近年三河湾でみられる傾向を示しており、興味深い。一部の魚種が近年みられなくなった要因を海域性の魚種の一時利用と考察しているが、三河湾全体の魚類の現存量が減少していることも考慮する必要がある。
- ・三河湾や豊川河口では、貝類を採餌するスズガモ(鳥類)が近年減少しているという情報がある。また、同様に貝類を採餌するイシガレイも少なくなっているようにみえる。これらの減少要因と底生動物の変化傾向を整理し、河口干潟の餌環境の変化を考察すると良い。

→イシガレイの個体数とアサリの湿重量については考察しているが、明瞭な関係性はみられなかった。他の魚類や鳥類と、餌としての底生動物についても経年的に整理する。(事務局)

- ・干潟の造成を予定している範囲でアサリの個体数が多いため、当該箇所の工事は是非を慎重に判断すること。

→継続して調査を行い、慎重に判断する必要があると考えている。(事務局)

#### <アサリ着底稚貝調査>

- ・2季目(H30秋～R1春)の調査結果から、河口部における着底稚貝の分布特性を4エリアに区分して示しているが、何を基準に分けているか。

→着底稚貝の出現の傾向に基づきエリア分けしている。(事務局)

- ・着底稚貝の殻長の推移について、成長速度式による推定値よりも小さくなっているが、殻長の小さい稚貝が断続的に加入したことで、個体群全体の平均値を下げたためではないかと考えられる。クロロフィル a 等のデータをみると、餌量は十分あると考えられ、殻長が小さい理由を説明することは難しい。

- ・植物プランクトンの調査結果から、河口部では、秋と春に植物プランクトンの増殖がみられており、アサリ等の生物資源にとって餌料は十分であったと考えられる。今後の調査において、河口部と海域部の着底稚貝や植物プランクトン量の推移を比較し、分析をすることが必要である。

- ・今後の調査計画については、三河港湾事務所と連携した調査となっており、画期的である。具体的にどのようなアウトプットを想定しているか。

→同時期に調査を行い、着底稚貝が、河口部から三河湾へ移動する過程を把握することを想定している。(事務局)

- ・着底稚貝の移動を把握することだが、実際の着底稚貝の量が分からないと、移動状況を把握するのは難しいのではないか。

→河口部の流況については未解明な部分が多いため、まずは現況を把握することに重点を置いて調査を行う。(事務局)

- ・今後の調査で、流況の連続観測のために設置予定の電磁流向流速計について、事前に対象範囲の流況を ADCP で把握した上で設置位置を決定した方がよい。

→ご意見を参考に検討する。(事務局)

- ・電磁流向流速計の固定には鉄製の杭・ポールは使用できないので注意すること。  
→設置時に十分に留意する。(事務局)

#### 4. 閉 会

以上